

平成25年度事業報告

1. 会議の開催について

(1) 理事会の開催

第1回 平成25年 6月 6日

第2回 平成25年 9月30日

第3回 平成25年 3月14日

(2) 常務理事会の開催

第1回 平成25年 7月23日

第2回 平成25年 9月20日

第3回 平成25年10月25日

(3) 評議員会の開催

第1回 平成25年 6月25日

第2回 平成25年 10月25日

2. 事業の実施について

研究所の自主研究および各種研究の概要は次の通りである。

○医療政策研究会

(0) 厚生労働省医政局総務課医療安全推進室長と面談。院内事故調査の手引きについて話しをする。

平成25年 5月 1日

(1) 医師会ガイドラインの作成者である聖路加国際病院精神腫瘍科 保坂隆先生をお呼びして医師の働き方のまとめについて、最終議論をする。

現在、「生存」に投稿するための準備がほぼ完了した。

平成25年 6月10日

(2) 構成労働者王医政局総務課医療安全推進室から3名の参加により、院内事故調査の在り方について議論する。

平成25年 9月18日

(3) 「院内事故調査の手引き」を改訂するに当たり、新たに別の出版社から出版された「院内医療事故の指針」について、内容の違い等を検討する。

平成25年10月25日

(4) 渡邊両治氏「医療の質・安全学会」での「院内事故調査の手引き」発表のために議論する。

平成25年11月12日

(5) 「院内事故調査の手引き」について、各章を各担当者に分け、改訂原稿を作成し、それらについて討議検討を重ね、改訂版をまとめた。

平成25年11月27日～同26年3月14日

○地域口腔医療研究会

- (1) 豊島区口腔保健センター「あぜりあ歯科診療所」での連携体制づくり

平成25年 7月22日

フリーディスカッション

- (2) 柏市における地域連携プロジェクト

平成25年10月31日

(社) 全国在宅歯科口腔ケア在宅連絡会 事務局長 大石 善也

- (3) 在宅ネットワークの構築地域での取り組みについて

平成26年 2月10日

国分寺歯科医師会横山歯科医院

横山 雄士

概要

地域口腔医療研究会では初年度、豊島区口腔保健センター「あぜりあ歯科診療所」に注目し検証を重ねてきた。特に在宅歯科診療、施設訪問診療においては全国的に見ても成功例の一つといえよう。検証を重ねるうち、いくつかのキーワードが浮上してきた。人材の不足、多職種連携の取り方、診療の継続性、患者のデータ管理、がそれである。

「あぜりあ歯科診療所」は自治体が委託し公益社団法人東京都豊島区歯科医師会がその運営にあっている。すなわち個人の診療所でも企業でもない。収益を追求する必要がなく、その収益を地域医療体制の充実のための事業に振り分けることができる。この成功のカギとなったのは自治体と歯科医師会との信頼関係であったからと考えられる。

当研究会2年目の25年度はその他にどのような在宅訪問診療への取り組みがなされているかについて検証を試みた。

○患者・医療者・社会の権利に附随する諸問題について考える研究会

- (1) リスボン宣言： 6. 意思に反する処置をされた患者の権利、
7. 情報に対する権利

平成25年 4月26日

- (2) リスボン宣言： 8. 守秘義務に対する権利
9. 健康教育を受ける権利

平成25年 7月 5日

- (3) リスボン宣言： 10. 尊厳に対する権利
11. 宗教的支援に対する権利

平成25年 8月 9日

- (4) リスボン宣言： 10. 尊厳に対する権利（前回議題を継続
11. 宗教的支援に対する権利

平成25年9月27日

- (5) ジュニアメンバーワーキンググループMSLとの共催勉強会

安楽死・尊厳死を考える

平成25年10月18日

(6) 疫学研究に関する倫理指針及び臨床研究に関する倫理指針

平成26年3月7日

(7) リスボン宣言10関連：安楽死尊厳死法案の概要

病棟における緩和ケア

平成26年3月26日

本研究会では、リスボン宣言（1981年世界医師会総会にて採択）での「患者の権利」を主要題材として、11種類の権利に附随する問題について言及する。リスボン宣言が策定されてから30余年が経過しているが、国内外の現状と照らし合わせ、現行の法やガイドライン等も参考に、現状との乖離がないかどうか討論を重ね、研究発表やパブリックコメント等を介して提言等を行なう。研究成果を目に見える形で示すことで社会に貢献して行きたい。

23年度から試行錯誤でスタートした本研究会の特徴は、医療現場や法曹界以外の多種多様の専門家と、さらに学生を正式メンバーに加えた点で、多角的に事象を観察し自由な意見交換のもとで問題点を話し合っている。

○ 先端医療技術倫理研究会

(1) iPS細胞研究の現状と課題

平成25年10月21日

早稲田大学理工学術院先進理工学研究科准教授 澤村 直哉

(2) 先端医科学研究の実施に必要なこと・もの～iPS細胞を用いる臨床研究を例に～

平成25年11月23日

京都大学iPS細胞研究所上廣倫理研究部門特定研究員 鈴木 美香

(3) 先端医療技術をめぐる倫理問題の構造－iPS細胞研究の現場研究

者との対話を手がかりに－

平成26年 1月 24日

東洋英和女学院大学教授 大林 雅之

(4) 倫理的コミュニケーションとは何か

平成26年 2月 28日

浜松医科大学医学部・倫理学 教授 森下 直貴

(5) 小児循環器領域における細胞内カルシウムシグナルの新たな役割－発生学の視点から

－

平成26年 3月 25日

東京家政学院大学現代生活学部 准教授 内田 敬子

概要：本研究会は先端医療技術に関連する現場の研究者との対話により、倫理問題の所在を明らかにすることを目的として、平成24年度より開始した。本年度は2年目を迎え、主に現場の研究者を講演者に迎え、研究を進める上での理論的、技術的問題点などの解説を受け、科学技術の社会的受容における倫理問題だけではなく、現場研究者の倫理意

識や、科学研究者の社会的な位置づけ等の問題点などを議論してきた。本年度は、主に再生医療や発生学における問題点などを、現場研究者の協力で議論してきた。再生医療の研究振興が期待される中で、遺伝子発現メカニズムや細胞分化・器官形成における未解明部分についても議論した。また、来年度が本研究会の最終年度にも当たることから研究会メンバーによる研究の方向性や取りまとめの要点なども議論し、来年度に向けての研究計画について検討した。

○「代替医療と語り」研究会

(1) 願望実現医療と代替医療～ナラティブの役割～

平成25年 8月12日

静岡大学人文社会学部社会学科・大学院人文社会科学研究科教授

松田 純

(2) 物語りと哲学ー＜二人称の科学の可能性ー

平成25年10月11日

東北大学教養教育院 総長特命教授

野家 啓一

(3) リカバリー・ストーリーに基づく社会へ 元犯罪者のナラティブから学ぶ

平成25年11月11日

静岡県立大学国際関係学部教授 / キャリア支援センター・センター長

津富 宏

(4) 化粧と化粧品の語り騙り

平成25年11月26日

元日本化粧品工業連合会広報委員長

能崎 章輔

(5) 代替医療とナラティブ：やはりエビデンスが必要だ

平成25年12月13日

聖路加国際病院一般内科

高橋 理

(6) Therapeutic Somatization 治療的身体化

平成26年3月5日

大阪産業大学人間環境学部 教授

中川 晶

○ 高齢者、障害者などの生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究会

(1) 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究の動向と課題

平成25年11月11日

東京家政学院大学現代生活学部健康栄養学科教授

松田 正己

(2) タイのユニバーサル・ヘルスケアについてー看護、地方自治、疾病構造の変化ー

平成25年12月12日

タイ国コンケン大学看護学部長

カニタ・ヌンタボット

- (3) 子どもの権利擁護—最近の子供をめぐる環境、虐待とユニバーサル・ケアについて

平成26年 1月 10日

日本子ども家庭総合研究所客員研究員

小山 修

- (4) ケアの本質と看護原論について「看護実践の考え方-F. ナイチンゲールから V. ヘンダーソンへ」

平成26年 2月 8日

財団法人北海道難病連「北海道難病センター」

見 学

北海道医療大学看護福祉学部基礎看護学教授

花岡眞佐子

- (5) がんの看取りとスピリチュアル・ケア

平成26年 3月 4日

浄土宗湯嶺山常光院浄心寺 住職

佐藤 雅彦

○動物の社会構造における精神疾患関連行動の意義

- (1) グループ飼育されているニホンザルを用いた衝動行動の社会的影響解明に向けた実験

平成25年9月24日～平成26年3月31日

京都大学霊長類研究所准教授

後藤 幸織

京都大学霊長類研究所教務補佐員

李 英娥

- (2) 野生型と研究目的のため家畜化されたマウスの社会構造相違比較の実験

平成25年9月24日～平成26年3月31日

京都大学霊長類研究所准教授

後藤 幸織

京都大学霊長類研究所教務補佐員

李 英娥

○児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究会

- (1) 研究会開催に当たっての打ち合わせ会

平成26年 1月24日

川崎医療福祉大学医療福祉学科 講師

直島 克樹

- (2) 日本における児童虐待の現状と課題—社会的養護におけるアフターケアの現状を中心に—

平成26年 2月15日

神戸学院大学総合リハビリテーション学部 講師

石田賀奈子

- (3) 支援過程における子どもの権利—児童虐待におけるソーシャルワークのあり方について—

平成26年3月20日

NPO法人日向ぼっこ 代表

渡井 隆行

NPO法人日向ぼっこ

安田 和喜

子ども家庭総合研究所主任 研究所員

和田 一郎

(概要)

第1回の打ち合わせ会において、児童虐待に関する研究は、様々な側面から進められているとはいえ、それが例えば措置解除後まで捉えきれていない現状、またソーシャルワークとしての支援過程において、当事者の声を踏まえた子どもの権利の保障に対する検討においては、尚大きな課題を抱えていることを確認した。

第2回の研究会では、日本の児童福祉の歴史も踏まえながら、近年の社会的養護の抱えている課題について、様々な資料を提示しながら、その課題の意味なども検討した。また、日本の虐待を受けた子どもの支援について、社会構造と結びつけて考えていく視点が欠けており、制度も追いついていないこと、さらに、そのことが措置解除後の子どもの支援において特に強く現れていることを確認した。

第3回では虐待発見時を含めた支援過程の各段階で子どもの権利をテーマに社会的養護の当事者の経験があり、現在は支援を提供する立場にある講師との議論を行った。

今後の方針として、複合的に重なる構造的要因に働きかける児童虐待支援としてのソーシャルワークの在り方や、当事者としての子どもあるいは経験者と共にアクションを起こしていくための政策提言などが重要となってくることが明らかになった。

○ 自然を活かした防災・減災研究会

(1) 「森の力」実証実験

平成25年11月21日

公益財団法人地球環境戦略研究機関国際生態学センター長

宮脇 昭

(2) シンポジウム「夢と希望のまちづくり講演会—東北復興に向けた技術と自然の調和

(シンポジウムの項参照)

(概要)

実証実験では、平成16年に植樹した仙台輪王寺における植栽地(30種類900本の土地本来の木々による多層群落の森)及び平成18年に植栽した森(輪王寺庭園内)の一部、2箇所をパワーシャベルで掘り、高圧洗浄機でシラカシ2本の根を洗い出し、その根系を調査した。その結果、根の成長には土中の空隙が必要条件であることを確認した。ふるさとの木によるふるさとの森づくりにおいて、目に見えない土中の条件が「森の力」を遺憾なく発揮させるために重要であることが明らかとなった。

東日本大震災から3年目となる2014年3月11日、被災地である宮城県において、講演会を行った。

○ 専門職の実践における判断の性質と役割についての研究会

(1) 感情のインフラストラクチャー、感情というインフラストラクチャー

平成26年3月1日

東京外国語大学総合国際学研究院教授

松浦 寿夫

○ 社会歴史文化的要因を背景とするソーシャルキャピタルとwell-beingに関する研究会

- (1) 「ソーシャルキャピタルと地域社会環境 ～マルチレベル分析、操作変数法、GIS を交えながら～」

平成26年1月6日

(株)EBP政策基礎研究所代表取締役

市田 行信

- (2) 「健康格差の視点からの健康づくり」

平成26年2月18日

山口大学医学部医学部地域医療

福田 吉治

- (3) 「歯科保健とソーシャルキャピタル」

平成26年3月24日

東北大学大学院 歯学研究科 国際歯科保健学分

相田 潤

本研究会の趣旨は、健康の成立要因の一つとして近年、脚光を浴びているソーシャルキャピタル(社会関連資本)について、多角的な視野から考えることである。特に、健康面において、従来は社会疫学的研究からの切り口で議論されることが多かったが、Bourdieuの、文化資本的アプローチを加味した考え方を取り入れることを意識した広い内容で討論をすることを意図している。

第3回本研究会は、「ソーシャルキャピタル研究会(代表：日本大学法学部 稲葉陽二教授)」と合同で行った。

シンポジウムの開催

- (1) 第1回生存科学シンポジウム

(公益財団法人生存科学研究所、公益信託武見記念生存科学研究基金共催)

平成25年12月14日 於：学士会館大講堂

「21世紀の生存科学を考える」

基調講演：21世紀の生存科学を考える

解剖学者 東京大学名誉教授

養老 孟司

講演1：生存科学をどう捉えるか

公益財団法人生存科学研究所理事長

青木 清

講演2：生存科学と教育について

株式会社日立製作所 役員待遇フェロー

小泉 英明

講演3：東日本大震災から生存を考える

国立大学法人長崎大学副学長 (福島復興)

山下 俊一

- (2) 市民公開講座「優しさを届ける介護技術 ユマニチュードを語る」

(公益財団法人生存科学研究所、独立行政法人 国立病院機構東京医療センター共催)

平成26年2月22日 於：上智大学 四谷キャンパス 10号館 講堂

基調講演：ユマニチュード

Gineste・Marescotti 研究所 所長 Yves Gineste

公開座談会：「私たちが体験したユマニチュード」

上智大学 教授 黒川由紀子

国立病院機構・東京医療センター 盛 真知子

国立病院機構・東京医療センター 森谷 香子

国立国際医療研究センター 金沢小百合

国立国際医療研究センター 丸藤由紀

ユマニチュードのこれから

国立病院機構・東京医療センター内科医師 本田美和子

(3) 夢と希望のまちづくり講演会—東北復興に向けた技術と自然の調和

(いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会主催、公益財団法人生存科学研究所共催)

平成26年3月11日 於：東北福祉大学けやきホール

講演Ⅰ 地球環境戦略研究機関国際生態学センター長 宮脇 昭

講演Ⅱ 俳優 菅原 文太

鼎 談 宮脇昭&菅原文太&今村文彦が大いに語る

地球環境戦略研究機関国際生態学センター 宮脇 昭

俳優 菅原 文太

東北大学大学災害科学国際研究所教授 今村 文彦

学術誌「生存科学」の発行

(1) VOL. 24. SER. A SEPT. 2013

(2) VOL. 24、SER. B MAR. 2014

3. 一般的運営について

本研究所の活動資金は、主に為替に左右される仕組債の運用収入によるが、政権交代に伴う経済政策の変更により、当初の収入見込みを大幅に超えたため、9月に事業拡大の追加募集を行い、自主研究は平成24年度からの継続6件—①医療政策研究会②地域口腔医療研究会③患者・医療者・社会の権利に附随する諸問題について考える研究会④先端医療技術倫理研究会⑤「代替医療と語り」研究会⑥臨床倫理指針研究会—に加え、新たに—⑦高齢者・障害者のユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究⑧動物の社会構造における精神疾患関連行動の意義⑨児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究⑩自然を活かした防災・減災の研究⑪専門職の実践における判断の性質と役割についての研究会⑫社会歴史文化的要因を背景とするソーシャルキャピタルとwell-beingに関する研究—の6件を追加し、合計12件とした。

各研究会は活発に行われ、外部研究施設との交流も盛んであった。専門職の実践における判断の性質と役割についての研究会では、初めて海外在住の研究者と Skype 対談を試みた。

助成研究も (1) 心臓および心臓病に関する研究、(2) 認知症・介護における心理社会的研究の 2 つのテーマにつき公募を実施し、それぞれ 3 件、7 件を選考した。

シンポジウムは公益信託武見記念生存科学研究基金との共催による第 1 回生存科学シンポジウム「21 世紀の生存科学を考える」を 12 月に学士会館大講堂で開催した。2 月には独立行政法人 国立病院機構東京医療センターと共催し、深刻な社会問題となっている認知症の新しい介護方法について、市民公開講座「優しさを届ける介護技術 ユマニチュードを語る」を上智大学 10 号館で開催した。東日本大震災から 3 年目の仙台では 3 月 11 日にいのちを守る森の防潮堤推進協議会と共催で、「夢と希望のまちづくり講演会—東北復興に向けた技術と自然の調和—」を開催した。それぞれのシンポジウムは現在日本社会が抱える問題と直結していたため、反響が大きく、「生存科学」という新しい概念の社会への浸透が大いに進んだ 1 年であった。

学術誌「生存科学」は会員のほか、国会図書館、全国医学部図書館など公共性の高い期間に無料配布、メディカルオンラインへ登録し、各大学図書館からのアクセスを可能にしているが、さらに本研究所のホームページでも創刊号からの目次が閲覧できるようにし、利用者の便宜に努めた。